

明日への力

日本総合研究所

リサーチ・コンサルティング部門
シニアマネジャー 齊木 乃里子

18



日本の高齢化率は、団塊の世代がすべて後期高齢者となる二〇二五年に三〇％に到達する見込みです。さらに二〇三〇年には一年間の死亡者数が今より三〇万人も増える想定される「多死社会」が到達するといわれています。

超高齢社会や多死社会の話は、ともすれば悲観的な文脈で語られることもしばしばです。むしろ、今後の高齢化がどう推移していくのか、また、多死社会の到来により、新たにどのような課題に直面するのは、誰もが経験したことがないため、マイナス面に焦点を当てるのは当然のことかもしれませ

多死でも幸せを感じられる社会に

大人を中心に据えた新しい「当たり前」を考える

護者となっている人の選択肢を大きく増やす可能性があります。また、どんな健康状態であっても、誰かに知恵を提供し、感謝されつつ生きる事ができるということでもあります。

さらに、その資産や選択肢を活用することとは、世代間の壁を取り払うということも不可分です。「高齢者施設」という言葉がありますが、高齢化率がますます高くなる今後の日本では、意味をななくなっていくでしょう。そのとき、互いに努力して歩み寄りながらも、自然と理解し合えるようになるためには、多世代が自然と交流できる場

ん。ただ、私たちは、高齢社会の先進国として「高齢者」大人の中心の大人が国民の中心にあり、がむしゃらな成長は望まないが、自分たちらしさを大切に成熟した国づくり、世界でいち早く着手できるのだと考えれば、違った政策や事業を生み出すことができないのではないのでしょうか。

そのためには、まず社会の対応力向上を目指して、一つ一つの経験をノウハウとして蓄積していくことが必要です。誰もが誰かの先生・メンターになれるという仕組みがあれば、大きな力になります。例えば家族の介護を経験したことのある人は、現在介

をつくっていくことが必要になります。敷地内に高齢者と美大生の住宅があり、保育園児が散歩に訪れる「シェア金沢」や、駄菓子屋のあるサービスタ付き高齢者住宅「銀木屋」などは、その好事例であるといえます。

実は、これまで述べてきたようなことは「昔からあるよ」と言われるかもしれません。しかし、それらが善意や個人の工夫からできていて、持続可能な状態になっていないければあまり意味はないのです。そのためには、場づくりや知恵とその活用が、事業として成り立っていて、かつ、もともとその事業を始めた人がいなくなっても、次の人が

継承できる(再現性がある)仕組みにする必要があります。

事業や仕組みは、「こんな風にしたいたい」という側と、それをかなえることができる側が出会うことで成立します。したがって私たちは、自分が高齢者になって、「一人暮らしをする」といった「認知症になったら」「治る見込みのない病気と付き合っていく」といった「どうしたいのか」といったことを考え、周囲の人と話してお互いが重要だ。終活やエンディングノート」とい言葉が一般化し、死について語ることは、少しずつ「縁起でもない」も

しも「話」ではなくなくなってきています。むしろ死の瞬間については、死にゆく道のおける一つ一つの選択が、どう生きたいかを意思決定したと同義で、それぞれの人の「自分らしさ」や「幸福感」に深くかかわっていると考えられます。その意味でも、私たちはそれぞれの思いを表明し、次の事業や仕組みをつくるアイデアや、社会の資産としていくべきです。

個人の思いが善意ではなく事業や仕組みによって支えられ、かつそれが高齢者という大人を中心に回っている社会、そこでは、家族構成や健康状態にかかわらず、「私はこれだよ」と思える選択をしながら、地域の中で自分らしく生きていける——私たちはそのような次の時代の「当たり前」をつくるための、極めて創造的な事業に携わっているということが可能です。

* 記事に関するお問い合わせは info@jri.co.jp までお願い致します。

◆シンポジウムの案内◆

九月二八日(金) 二時より、経団連会館(大手町)にて、多死社会を迎える日本国民一人ひとりが「幸福な最期を選ぶ」のためにと題したシンポジウムを開催致します。お申し込みは左記ホームページからお申し込み下さい。(お申し込み締切: 九月二〇日)
https://www.jri.co.jp/seminar/1809_28_486/detail/